

特集：台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究

台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究
——人骨資料の整理と共同研究の経緯——土肥 直美^{1*}、盧 國賢²¹琉球大学医学部
²国立台湾大学医学院Physical Anthropological Studies of the Human Skeletal Remains Stored in
National Taiwan University College of Medicine

—Rearrangement of Human Skeletal Remains and Preparation of the Joint Research—

Naomi Doi^{1*} and Kuo-Shyan Lu²¹Department of Anatomy 1, Faculty of Medicine, University of the Ryukyus
²Department of Anatomy, National Taiwan University College of Medicine

はじめに

筆者の一人である土肥が初めて台湾大学を訪問したのは1997年のことである。沖縄県教育委員会の台湾調査に参加させてもらったのだが、その時、台湾考古学会の重鎮である宋文薫台湾大学人類学系名誉教授をお訪ねする機会があった。宋先生は台北帝国大学時代から金関丈夫先生と親交のあった方で、土肥が金関先生ゆかりの九州大学医学部解剖学教室で人類学を学んだというだけで大変歓迎していただいた。そして、金関門下だった蔡錫圭台湾大学医学院名誉教授に紹介していただいたのが、本プロジェクトの第一歩だったように思う。その時初めて、金関先生等によって収集された人骨資料が台湾大学医学院解剖学科に保管されていることを知った。

金関門下による膨大な研究成果は台北帝大医学部解剖学第二講座論文集、あるいは台湾大学医学院解剖学論文集にまとめられており、人類学研究に不可欠の資料とし

て、今でも多くの論文に引用され続けている。しかし、戦中・戦後の混乱の中でこれらの人骨が生き延びているとは想像もしていなかった。今では九州大学博物館で安全に保管されている金関・永井コレクションも、そこに辿り着くまでには多くの難関をクリアしなければならなかったことを知っているからである。蔡先生はこれらの資料を半世紀以上もの間、守り続けて来られたのである。その間、解剖学教室は4回も引っ越しをしたということであるから、まさに奇跡としか言いようがない。さらに、蔡先生はこれらの人骨を何とか再生させて、世界中の研究者に開放したいと考えておられた。何というすごい人だろう！というのがその時の印象である。

1998年、台湾大学医学院解剖学科のスタッフを中心とする人骨資料再生のためのプロジェクトがスタートした。そして、土肥はそのお手伝いをさせていただくことになった。プロジェクトは筆者の一人である解剖学科教授盧國賢が中心となり、半世紀分の埃を洗い流す作業、

*琉球大学医学部解剖学第1分野
〒903-0215 沖縄県中頭郡西原町字上原 207
E-mail: doinaomi@med.u-ryukyu.ac.jp
©2008 The Anthropological Society of Nippon



写真1 体質人類学研究室

記録の確認、台帳作りなどを精力的に進めた。さらに、当時の台湾大学医学院院長・謝博生教授の深い理解と多大な支援を得て、2000年8月に「体質人類学研究室」の開設が実現した(写真1)。

台湾大学医学院の資料には先史時代から近代までの人骨が含まれており、台湾だけではなく、東アジア・太平洋を含む人類史の解明に大きな貢献が期待できる。現在、資料は世界中の研究者に開放されている。

今回の特集は、2005年から2007年に台湾大学医学院解剖学科体質人類学研究室と日本の研究者9名とで行った共同研究の成果をもとに、2008年5月29日に台湾大学医学院で行われたシンポジウム「台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究」での発表内容を中心にまとめたものである。

資料の概要

人骨は頭蓋骨だけで1580体余が確認されている。詳細な個体識別ができない資料も含まれるため資料数は増える可能性があるが、現状での内訳はおおよそ図1のようになる。

福老と客家は17世紀以降に中国本土から移住してき

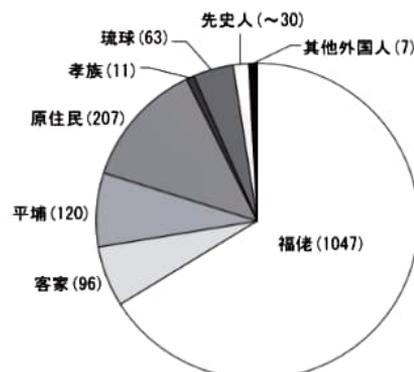


図1 台湾大学医学院収集人骨の内訳

た漢族の子孫で、両者は本省人として、同じ漢族ではあるが戦後に移住した外省人とは区別される。福老は主に福建省から、客家は主に広東省から移住した人たちの子孫である。平埔族は台湾西部・北部の平野に住む原住民とされるが、彼等の大多数は混血により文化的にも遺伝的にも漢化が進んでいると考えられている。

いわゆる台湾原住民と呼ばれているのは山地や東部に住み、独自の民族文化をもつ人たちである。本資料には207体が含まれている。内訳は泰雅(タイヤル)族145体、布農(ブヌン)族46体、雅美(ヤミ)族10体、排湾(パイワン)族6体である。布農族の資料は蔡先生と鹿児島女子短期大学・竹中正巳准教授によって2001年に整理され、資料化されたものである。

先史時代の人骨は保存不良のものが多く、発掘時の記録が消失しているものも含まれるため正確な個体数を求めることは出来なかったが、四肢骨のみのものを除いた個体数は約30体程度と思われた。主要な先史時代人骨は墾丁寮(約20体)、烏山頭(2体)、圓山(1体)、小基隆蕃社後(2体)、基隆社寮島インデンベルフ城址出土(1体)、桃仔園(2体)などで、時期は新石器時代とされている。台湾の新石器時代は約7000年前から5000年前までの前期、約5000年前から2000年前までの中・後期に分けられるが、人骨のほとんどは中・後期に属するものである。

孝族は海南島の少数民族である。その他に、まとまった資料としては琉球がある。骨に運天と記されたものがあるので、おそらく、多くは沖縄県今帰仁村運天の風葬墓から出土した人骨と思われる。また、琉球以外にも少数の外国人資料が含まれている。尚、人骨資料関連の文献は本特集末に掲載した「台湾大学医学院体質人類学研究室所蔵の人骨」の項に挙げていたので参照されたい。



写真2 調査風景

上：体質人類学研究室での調査
下：卑南文化公園・国立台湾先史文化博物館訪問



写真3 シンポジウムの様子

上：盧國賢教授，中：蔡錫圭名誉教授，下：片山一道教授

共同研究とシンポジウム

体質人類学研究室の次の目標は資料をより多くの研究者に活用してもらうことである。そのためには、新しい研究成果を出すことによって、資料の存在とその意義を広く知ってもらう必要がある。そこで、私たち日本の人類学者との共同研究が計画された。共同研究は2004年の予備調査からスタートしたが、その際、先ず資料のリスト作成が必要であること、総合的な研究計画が必要であることなどが確認された。2005年から2007年に行われた共同研究「台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究」には、各分野のエキスパートが加わり、総合的な調査に取り組むことになった（写真2）。

共同研究の成果は2008年5月29日に台湾大学医学院で開催されたシンポジウム「台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究」で報告された（写真3）。シンポジウムには学内外から多数の方が参加され、予想以上に熱い議論が展開された。シンポジウムを通して、共同研究の

目的の一つだった「資料の意義をアピールする」ことが出来たのではないかと思う。参考までにシンポジウムのプログラムを以下に紹介する。

「台湾大学医学院収集人骨の人類学的総合研究」

コーディネーター 盧國賢

講演

1. ブスン族の頭蓋の特徴 ○蔡錫圭・竹中正巳
2. ラビタ人の起源を求めて：ラビタ頭蓋と墾丁頭蓋の比較 片山一道
3. 古代DNA：過去の社会への遺伝学的なアプローチ—台湾大学所蔵のブスン人骨コレクションを用いた過去のヒトの移動の再現 篠田謙一
4. 台湾人の古食性復元：台湾大学コレクションにおける同位体分析 米田 穰

おわりに

本稿では、「先住民」を指す用語として「原住民」を用いているが、台湾では「先住民」が「すでに滅んでしまった人」、「原住民」が「もともと住んでいた人」という意味で使われることに従ったためである。台湾大学医学院収集人骨は、蔡先生の強い意志と謝医学院長（当時）の理解がなければ、半世紀以上の時を経て蘇ることはなかった資料である。私たちはその意義を重く受け止め、次の世代に繋げる努力をする責任があると思う。

今回、同じ意識をもって共同研究に参加して下さった九州大学大学院・中橋孝博、国立科学博物館・篠田謙一、鹿児島女子短期大学・竹中正巳、東京大学大学院・米田

穰、京都大学大学院・片山一道、東北大学大学院（（現）北海道文教大学）・百々幸雄、九州大学大学院・岡崎健治、国立科学博物館・坂上和弘の諸先生に心からお礼を申し上げたい。そして、今後とも資料が広く活用されていくことを願っている。

謝 辞

資料整理、共同研究の企画、実際の調査においては、多くの方々から貴重なご助言と温かいご支援をいただいた。末筆ながら記してお礼を申し上げたい。

台湾大学文学院人類学系・宋文薰名誉教授・連照美教授・陳有貝助教授、台湾大学医学院解剖学科の皆様、琉球大学医学部解剖学第1分野・石田肇教授および教室員の皆様、国立民族学博物館・野林厚志准教授、高雄市阮総合病院・阮仲洲院長、西日本新聞台湾支局・龍口英幸支局長（当時）。

